

沖縄市文化財調査報告書第2集

# 鬼大城の墓

1980年3月

沖縄市教育委員会

# 鬼大城の墓



## もくじ

---

鬼大城の墓	1
調査の概要	2
平面図	5
図版	6
案内図	23
資料篇	25

---

# 鬼大城の墓

- 所在地 沖縄市字知花
- 管理者 大城 亀一郎
- 住所 浦添市字前田 163



## 調査の概要

・調査年月日

昭和54年8月25日

鬼大城の墓の調査が、昭和54年8月25日の午前1時から沖縄市教育委員会の手によって行なわれた。当日の調査には、名嘉真宜勝読谷村立歴史民俗資料館長を主任に、県文化課上江洲専門員、市文化財調査審議委員、市社会教育課職員が、門中の方々から話を聞きながら着手した。

鬼大城の墓は、知花グスク中腹にあり岩陰を利用して作られた洞穴開い込み墓である。おもては石を積み上げてムチ（しっくい）でかためてあり墓口は南（首里）の方角に向っている。墓石の右側地上約110cmのところには、霊の出入り口用に、浦添ようどれなどに見られる小穴があいている。調査は、門中の手で高さ174cm、幅80cmの墓石がはずされ、更に板戸がはずされた。墓の中は、自然の岩陰洞穴を利用してあるせいか、むしろ乾燥に近い状態で、天井までの高さ239cm、広さ約30平方メートルとかなりひろい。墓の内部には、石棺が10個、大小のカメ型罏子が23個あり、破損した石棺のかけらやカメのかけらが一ヶ所に積まれており、これまで何かの形で墓の内部が荒らされた形跡がうかがわれた。門中の一人は、「以前は墓石がなく板戸だけだったので出入りもたやすく、戦後も外人が入ったという話を聞いたことがある」と話してくれた。

墓の内部に納まった石棺で、銘が判読できるもののうち、最も古いものと思われるのは石灰岩製寄棟式罏子で、嘉清36年（1557年）の文字があった。又、銘のない石棺も多く、どの石棺が鬼大城のものか断定しかねたが、ふたの一部が欠けた石棺のふたと身に大きく墨書きで元祖と銘されたものを目をひいた。



△夏氏大宗墓碑銘▽



知花城跡にある「鬼大城の墓」内部を調査する沖縄市教育委員会の調査班

## 鬼大城の墓 学術調査始まる

沖縄市・知花城跡内

【本報記者宮内邦典】首里王族の墓所「鬼大城の墓」が、約七百五十年にわたる歴史を刻み、その歴史を伝える「大城」として、現在も知られる鬼大城（大城）で、知花城跡（大城）の墓（首里王・知花城跡）の調査が、首里市教育委員会の調査班によって行われる。

鬼大城は、首里王族の墓所として、約七百五十年にわたる歴史を刻み、その歴史を伝える「大城」として、現在も知られる鬼大城（大城）で、知花城跡（大城）の墓（首里王・知花城跡）の調査が、首里市教育委員会の調査班によって行われる。

# 首里王府の総大将

---

# 数奇な運命たどる

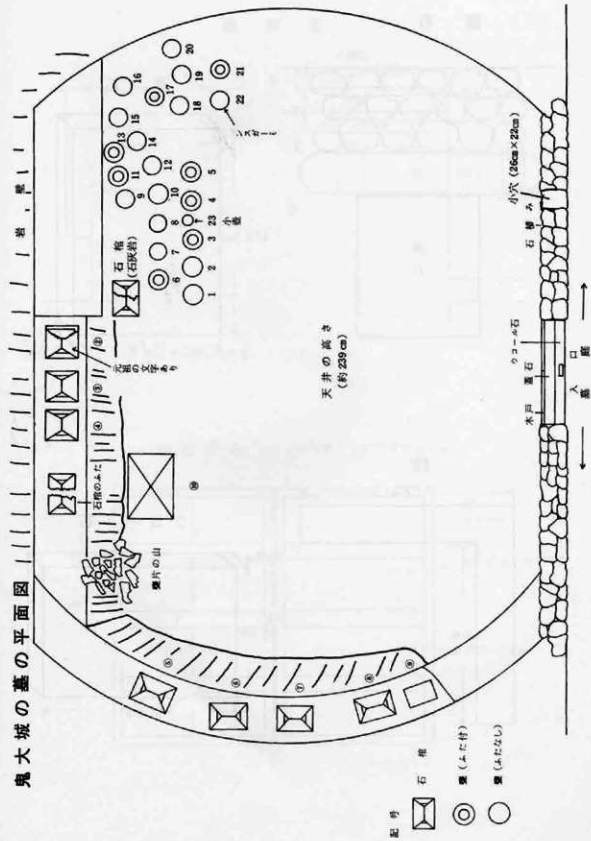
首里王府の総大将として活躍した首里王族の歴史を、首里市教育委員会の調査班が、鬼大城跡の墓所を調査している。

首里王府の総大将として活躍した首里王族の歴史を、首里市教育委員会の調査班が、鬼大城跡の墓所を調査している。

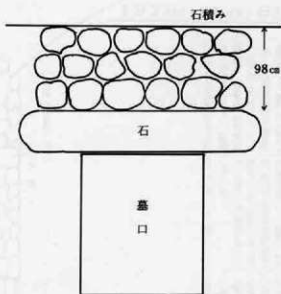
首里王府の総大将として活躍した首里王族の歴史を、首里市教育委員会の調査班が、鬼大城跡の墓所を調査している。



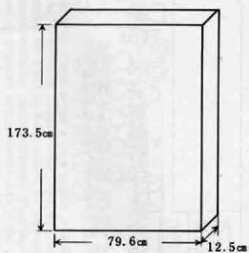
鬼大城の墓の平面図



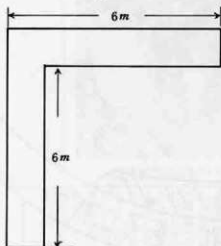
# 蓋石



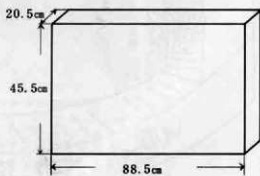
# 蓋石



# 段

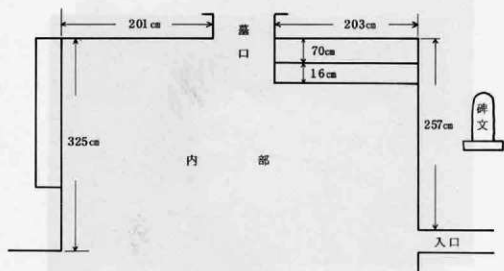


# ウコール石



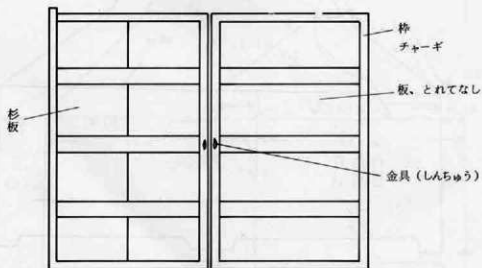


## 墓庭垣



※ 墓は洞穴囲い込み墓。モチで塗ってある。

## 中とびら (チャーギ製) 2枚 (はめ込み式)

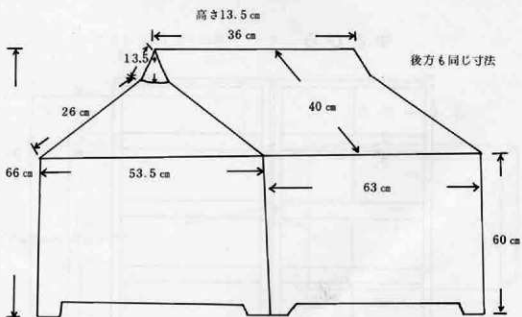


平面図① 石灰岩製入母屋式厨子

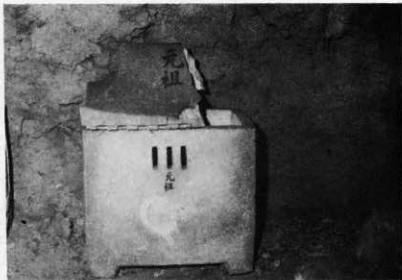


※ 古いと思われるが銘が確認できず。

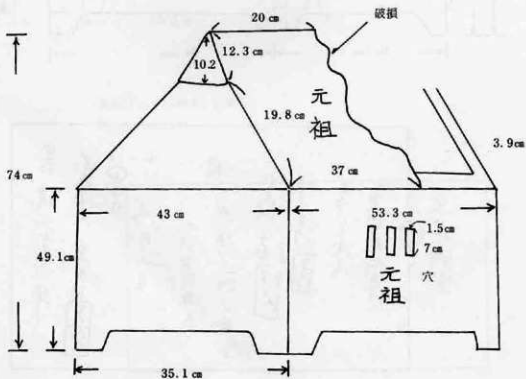
図 1



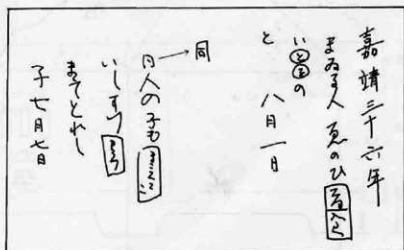
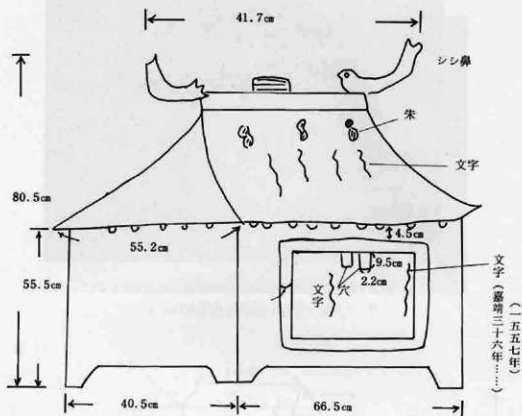
平面図② 石灰岩製寄棺式厨子



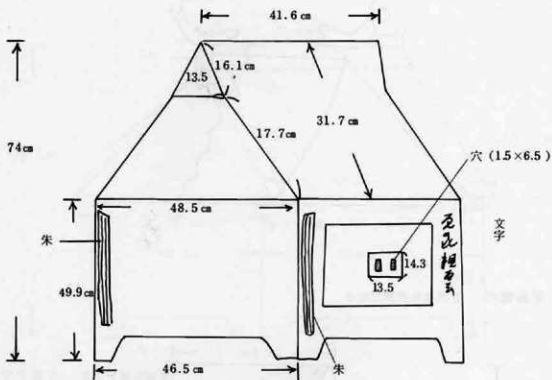
※ 蓋の部分が破損している。石棺には風化した骨がある。  
身とふたにそれぞれ「元祖」の字あり。



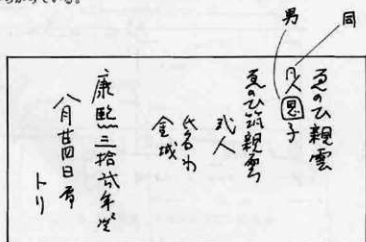
平面図② 石灰岩製寄棟式厨子

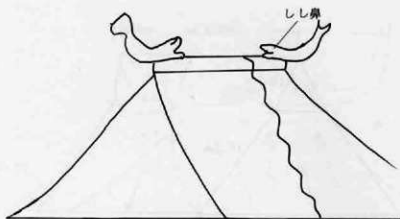


平面図④ 石灰岩製入母壘式厨子



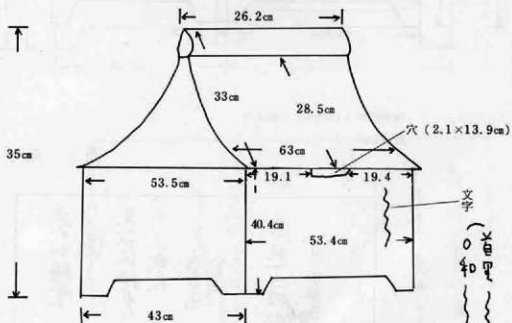
- ・ 康熙32年（1693年）の銘あり
- ・ 蓋がらがっている。





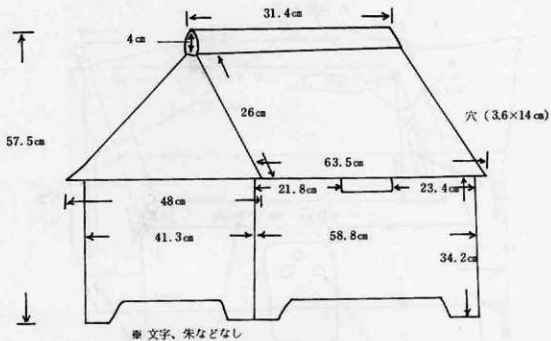
※ ふただけ。 割れている

平面図⑥ 石灰岩製寄棟式厨子

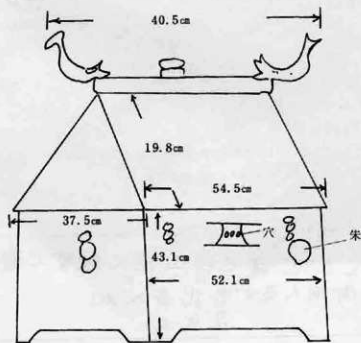


※ 西側の段の上にある、文字あり、朱なし

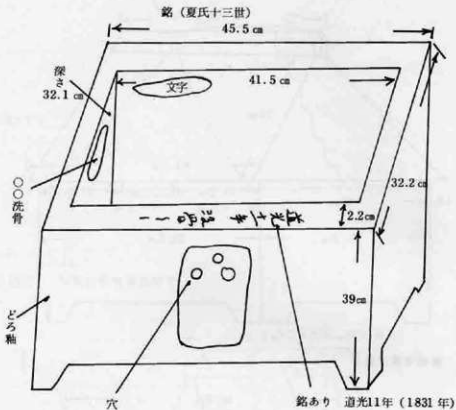
平面図① 石灰岩製寄轆式厨子



平面図② 素焼寄轆式厨子



平面図⑨ 素焼製厨子（身だけ）

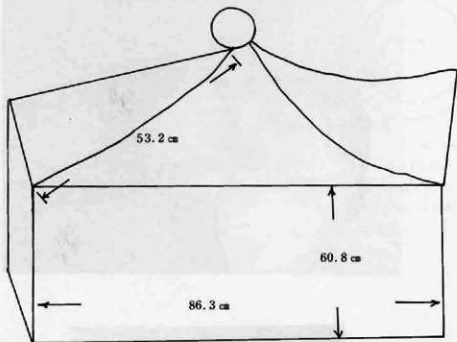


- 底に穴があいている。
  - 銘あり
  - どろ軸がかかっている、中穴の穴のある部分は軸がかかっている。
- 蓋はない、身だけ、仏等の模様あり。

夏氏立世諱世楫上運天親雲上賢節 夏口堂  
 御同人長女恩武骨入加  
 忍武大

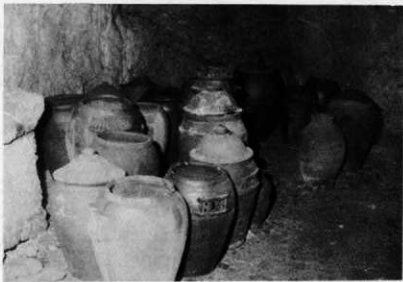


平面図㊦ セメント製奇様式厨子（1959年製作）



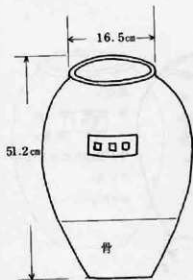
破片の山

(平面図1～21の厨子ガメ)



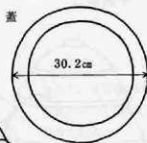
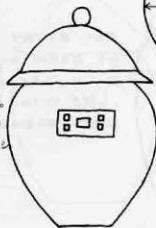
墓の内部石積

平面図 1



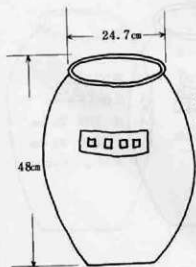
骨、頭骨が納  
っている。  
水が滲っていた。  
蓮の線刻文あり  
ポージャージージ  
蓋なし

平面図 3



身 口径 27.3cm  
高さ 45.5cm  
骨少し残っている。  
乾隆59年 (1794年)  
の銘あり

平面図 2



蓋なし  
蓮線刻文  
ポージャージージ

平面図 4



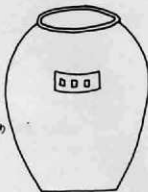
蓋あり  
身 口径 30cm  
高さ 55.8cm  
康熙60年 (1721年)  
の銘あり  
ポージャージージではない。

平面図 5



蓋あり。獅子の飾付あり。蓋直径30.7cm  
身 口径 29.6cm  
高さ 60.4cm  
昭和10年改葬の銘あり

平面図 7



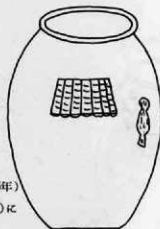
蓋なし  
身 口径 26.5cm  
高さ 50.8cm  
骨が底の方に少し残っている。  
ポージャージージ

平面図 6



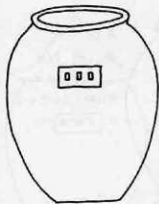
蓋付 蓋直径 29.8cm  
身 口径 24cm  
高さ 46.1cm  
蓮紋様  
康熙45年亡(1706年)  
々 49年(1710年)に  
洗骨の銘  
ポージャージージ  
素焼

平面図 8



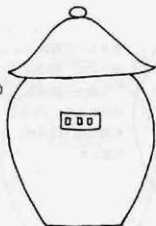
蓋なし  
仏紋等あり  
身 口径 29.5cm  
高さ 58.8cm  
ポージャージージ

平面図 9



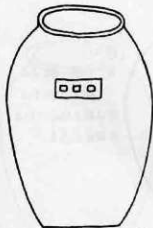
蓋なし  
身 側面に銘あり  
雍正15年(1730年)  
骨少しあり  
ポージャージージ

平面図 11



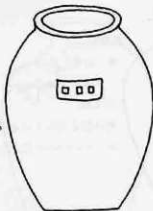
蓋あり。蓋直径29.5cm  
乾隆27年(1762年)  
洗骨の銘あり  
身 口径 27cm  
高さ 45.4cm  
骨は粉と化している

平面図 10



蓋なし  
身 口径 26cm  
高さ 47cm  
蓮紋様  
骨は粉と化している

平面図 12



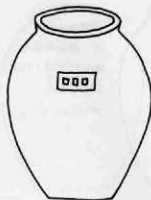
蓋なし  
身 口径 29cm  
高さ 50.5cm  
骨は粉と化している  
ポージャージージ

平面図 13



蓋あり。直径30.8cm  
身 口径 28.3cm  
高さ 44.5cm  
骨は粉となっている。  
乾隆9年(1744年)  
の銘あり

平面図 15



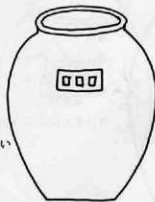
蓋なし  
身 口径 24cm  
高さ 44.8cm  
骨は粉と化している  
ポージャージーシ

平面図 14



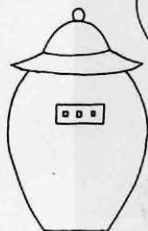
蓋なし  
身 口径 26cm  
高さ 54.2cm  
穴3個  
骨は粉と化している  
ポージャージーシではない

平面図 16



蓋なし  
身 口径 28.4cm  
高さ 50.1cm  
骨は粉と化している  
長管骨がある。

平面図 17

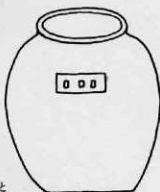


蓋



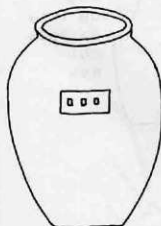
蓋 直径31.5cm  
 銘あり、雍正2年  
 (1724年)  
 身 口径 27.5cm  
 高さ 56.5cm  
 骨は粉となっている  
 乾隆9年(1744年)と  
 乾隆22年(1757年)

平面図 19



蓋なし  
 身 口径 22.2cm  
 高さ 39.3cm  
 頭骨片少し残っている  
 ポージャージーン

平面図 18



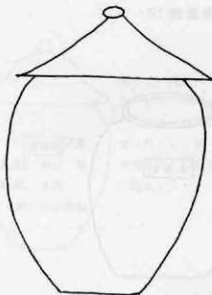
蓋なし  
 身 口径 24cm  
 高さ 44.6cm  
 骨は粉となっている  
 ポージャージーン  
 焼しめられ、黒い光た  
 くあり

平面図 20



蓋なし  
 身 口の部分が割れて  
 いる  
 口径 24cm  
 高さ 48cm  
 骨は粉となっている  
 穴5個  
 ポージャージーン  
 光たくあり。

平面図 21



蓋付 直径30.7cm

身 口径 24.5cm

高さ 49.2cm

乾隆18年の銘

骨は半分粉となっている。

穴5個あり。

平面図 22



味曾壺

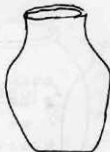
耳3個ついている。

口径 16cm

高さ 43.8cm

骨なし

平面図 23



味曾壺

口径 14.1cm

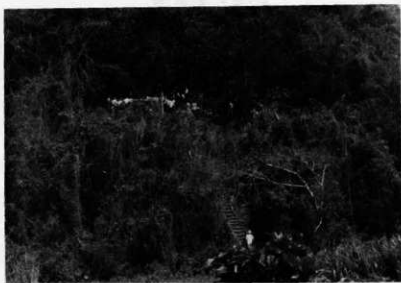
高さ 30.5cm

穴なし

骨なし

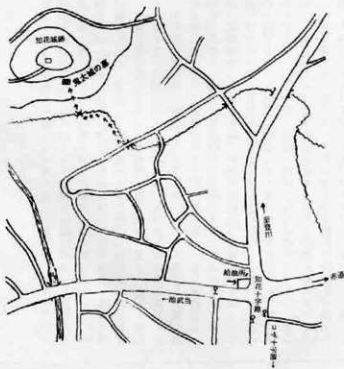


# 鬼大城の墓遠景



(知花グスク中腹)

## 案内図



# 資料篇

## 夏氏大宗墓碑銘

当所ハ壬ニ座シテ丙ニ向フ昔ヨリノ墳墓ナリ康暦五拾五申年ニ至リテ当郡宮里邑中間原  
 江地理ヲ撰ビ祖宗ノ靈骨ヲ遷シ葬ラレシガ銘ナシノ厨子残り居ケル伝アリ年コト清明ノ祭  
 奠ハ兩墓共行ヒ来リケル〔註、二行ニ書カレタ〕然ル処ニ宮里ノ墓ハ山ニ築立ツユヘ時ニ  
 修理ノ費アリシ上前面地形下リ年久フシテハ害地ニテ永代保ヲ難カラシム事ヲ懼レ当世ノ子  
 孫等亦以テ此墓江遷シ奉ラン事ヲ願フコト爰ニ二年アリ因茲郡良佐与儀通事親雲上ヲ頼ミ兩  
 墓ノ風水見分ニ入シニ当所ハ山隸堅固ニシテ諸木盛生前後左右遠近之抱擁氣味貫ヌキ前之  
 川筋ナド都テ風水ノ法ニ叫エ地之美ヲ得ケルヨシ宮里ノ墓モ一脈之山形ハ宜シケレト過山  
 ニ總忌之山アリト申サル意ニ遊宮年久シク松濶ノ山脈以前ト替リシ所モ出来ヌラン殊ニ墓  
 之天井深多クシテ遺骨之為ニモナラサラン青島經ニ凡地ニ五ツ之不祥アルハ改ムヘシ且伊  
 川先生之御説ニ地之美ハ則チ其神靈安ジ其子孫盛シ其根ヲ培壅シテ枝葉茂ルカ如シ何ヤ  
 カ地之美ト謂土色之光潤草木之茂盛ソノ驗也父子祖孫ハ同氣被安キ時ハ此安シ彼危キ時ハ  
 此危シト見ヘケルヨシ良佐カ教ヲ承リ弥以テ裔孫中早ク当所江遷シ奉ラン事ヲ云熟惟ルニ  
 改葬之事ハ不容易トイエトモ宮里之墓ハ件之通最通リ難ク止事ヲ得ザルノ碑アリ此墓ハ風  
 水宜シキ而已ナラス古昔ヨリ用ヒ来リ且雍正元(一七二三年)即年知花色ノ者共書留ニ鬼  
 大城越來親方先後祖誰人トモ御名字不相知トイエトモ安置ノ厨子大破ニ及ヒ石厨子ニ替エ  
 安置シ奉ルノ趣キ相見得当家家之伝エモ符合イタシ勞難ナク訣合門中ニモ吟味ヲ遂ケ朱夫  
 子三タビ遷サレシ御意ニ準ラエ知花色ノ者共エハ墓式箇所築立相与エ面々祖先ノ遺骨ヲ移  
 サセ後年何角不申出ノ証書ヲ取ル厨子記ノ通り石厨子四ツ焼物厨子壱ツ都合五ツ〔三ツ銘  
 ナシ〕素ヨリ安置ノ上ハ古昔ノ祖先此子細馬衍弁別イタシ抱護之山脈川筋流レノ順逆能ニ  
 氣ヲ附祖宗之旧墳万世最通リ子孫ニ蕃衍家道平康ナラン事ヲ希ヒ右之件石ニ勒シテ不朽ニ  
 垂畢

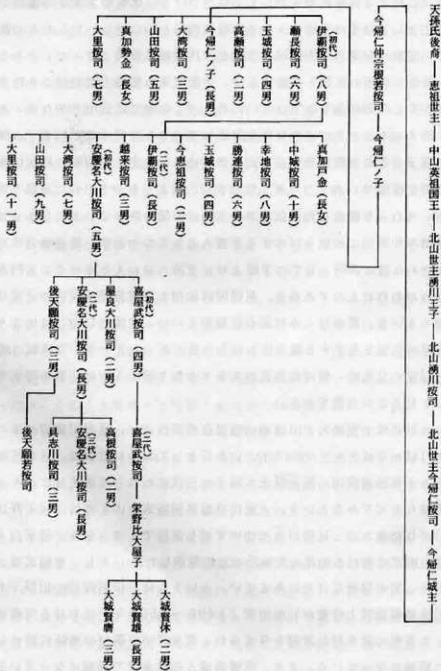
當

大清咸豐二年歲次癸丑十一月吉旦  
 (一八五二年)後裔超口國謹誌

碑文は中山盛茂編「琉球史辭典」より

# 城 大 鬼

深い樹林におおわれた知花城の南面する中腹に一基の古墓があり、その中に、古琉球の戦史とロマンをあでやかに彩ったひとりの英雄がひっそりとねむっている。その名を大城賢雄、諱を夏居敷といひ、俗に鬼大城と呼ばれた。賢雄の系図は下のとおりである。



賢雄の曾祖にあたる初代喜屋武按司の祖父・初代伊覇按司は、霸気満々たる土豪であった。彼は11男1女の子宝に恵まれ、男子はすべて中南部要衝の地の按司に配している。彼は自己の勢力圏を積極的に拡張すべく武力に訴えたようである。彼は御先勝連（オサチカッチン）とよばれる系統の按司家を亡ぼし、勝連城に自分の六男を入れて勝連を仰領している。また、喜屋武城下の具志川市字仲嶺の徳田家の家譜によれば、伊覇按司はこれまで喜屋武城主として二代つづいていた奥間大親系の按司を亡ぼし、三代目城主として自子の三男を入れて喜屋武按司とした。しかしこの人に世子がなかったため、同族の安慶名大川按司の三男が四代喜屋武按司となった、とある。このくぐり、細部で前掲の系図と齟齬するが、伊覇按司の膨張主義の野心を物語る基調はいささかもそこなされるものではないだろう。この勢力拡張のしかたは、あるときには武力に訴え、あるときには外交術を駆使してのやり方だったとおもう。鼻祖を英祖王とする霸王の家の血筋を受け、その毛並みの良さと文化的教養の高さはあたりの土民を精神的に威服せしめる力があつたらうし、何よりも、すぐれた武器と武術と戦術や外交術、それらを総合した兵法において他の追隨を許さないものがあつた筈である。

大城賢雄が即興的に神歌を口にする教養人としての一面や、勝連城討伐の国家的大任をまかされた彼の武將としての才器とは、支流とはいへともその名門を誇る家風の中でつちかわれたものであろう。英雄阿麻和利も初代喜屋武按司の兄屋良大川按司の血をひくという。彼のたくみな民心収攬術といい、兵法といい、なによりも首里城中で諸按司の会盟を主宰する議長格という大任にあつたという。首里城の威光に屈服されない程度の文化的、精神的素養が大なり小なり彼のうちに在野の時すでにそなわつていたと見るのが自然である。

賢雄の元祖初代・安慶名大川按司の四男喜屋武按司は、具志川間切仲嶺に喜屋武城（一名火打城・今はチャンマーブイという丘として知られている。）を居城とした。そしてその子喜屋武按司、孫栄野比大屋子の三代にわたつて居住した。その栄野比大屋子が賢雄らの父であるという。「夏氏祖源宗徳總攷」によれば、父栄野比大屋子が病気で早逝したため、三兄弟がまだ幼年で城を保持できなくなり、母子四人で城を出奔し、母の実家にあたる知花の大城氏の元に寄寓した。しかし、喜屋武城が廃城になった原因は、父の早逝だけではあるまい。というのは、伊覇按司の居城であつた伊覇城も、五世伊覇親雲上仲貴が弘治年間（1490 - 1508年）における尚真の中央集権策によって首里に居を移し黄冠を与えられ、美里間切伊覇村の地頭に補せられ、それとともに廃城になっている。また、安慶名城も三代までで廃城になっている。この三

代安慶名大川按司は、伊弉城最後の城主と同世代であるから、ほぼ同じ時期に廃城になっているはずだ。最後の喜屋武城主である賢雄の父栄野比大屋子は、世代としては、伊弉や安慶名よりも一世代若い。喜屋武城が廃城になったのは伊弉城、安慶名城よりすこしはやくだったようだ。この三つの城が廃城になったのは、それらの割拠的存在をゆるさない政治・経済をふくむ社会的情勢の進展がその原因だともう。近傍地域では、具志川城や江洲城なども大体このころ廃城になっている。このように、第一尚氏王朝末期におこった群小城郭の社会変動による廃城への自然的傾向は、第二尚氏王朝の尚真王の時代になって首里への諸按司（諸城主）の移住という形で制度化された。これが尚真王の中央集権政策である。

長男賢雄（唐名夏居敷）二男賢休（夏居忠）、三男賢膺（夏居勇）の三兄弟であったが、成長後、賢雄と賢休が大城姓を賢膺が平良姓を名乗った。母の願いで三人とも時の越来城主尚泰久に出仕した。のちの第二尚氏の開祖尚円王となる金丸もその時尚泰久に仕えていた。金丸と賢雄はのちに琉球政府にあって文武の双璧となり、琉球史の命運をになった。この二俊秀を用いた尚泰久もまた具眼の名君だったわけだ。

1453年、尚金福王が死に世子の志魯があとをつぐことになったが、それまで摂政として権勢のあった布里が、自分こそ王弟であって王位をつぐべきだとして異議をさしはさんだ。こうして骨肉相食む内乱がおこった。激戦のうちに首里城を炎上させただけでなく明朝から賜った国王の金印も焼失したあげく、布里、志魯ともに戦死してしまった。この後をうけて王位についたのが尚泰久である。尚泰久は尚巴志の第七子で尚金福や布里とは兄弟であった。尚泰久は内乱の結果、思いがけない王座にのぼることになったが、そのとき賢雄ら三兄弟と金丸をつれて首里城に入った。

ときに、すでに勝連城をのっとっていた英雄阿摩和利は、虎視眈々とつねに王位篡奪をはかっていた。阿摩和利は1458年、当面の宿敵中城々王護佐丸を倒し、野望達成への第一歩を飾った。そのころ、国王尚泰久の王女踏揚按司が阿摩和利のもとに嫁ぐことになった。そのいきさつを『夏氏由来記』は次のようにのべている。

去る程に尚泰久王阿摩和利の才能人に過ぎたる由聞し召し、即ち婚姻を約して、一家のよしみを結び玉ふ。かくて後日、翁主踏揚按司勝連按司に嫁ぐ。時に王母、王に言つて曰く、阿摩和利の生資才能人に勝れて尤吉也。然れ共我疑ひ思ふには、彼王婿に為さば、其勢を挟み、驕心起て患をなさん事も計り難し。且彼地都遼遠の所なれば、変事あれ共知り難し。因て吾心未だ悦ばず。誰ぞ検見の爲め武士一人<sup>or</sup>切かに附け遣すべし、との玉ふ。王母の御心を安め奉らん爲めに、王則ち鬼大城に命じて

其臣士となし、翁主（王女のこと）に附隨して勝連に赴かしむ。

この結婚は尚泰久の深慮遠謀から出た政略結婚だとすれば、結果的には成功しているが、それだけに悲劇的である。正史「球陽」は、賢雄について「首里州に一忠臣有り。姓は夏、諱は居敷、名乗は賢雄、俗に鬼大城と名づく。其の人と為りや、忠義剛直にして武勇無比、骨格人と異なり、勢狼虎の如し。是れに由りて当時の人、鬼大城と呼ぶ。」とのべており、その盛名はすでにきこえていた。

彼の体力が非凡で骨格が偉大であったことは、日頃彼が腕力の鍛練に用いた黒石でできた四斤二十匁のお手玉と、身長七尺ぐらいの人でなければ着られないような彼の着衣がよく物語っている。これらの遺品は市内宮里の石城という彼の妾宅に残っていたという。伝説によると、彼が妾宅の石城に乗馬で来る時、馬に乗ったままで米倉の梁を片手で押し上げ、馬の手綱をさしはさんでつないだという。また、左の手に石臼をのせて右の手で麦の粉をひいたという剛力ぶりを示したという。且暮にも鍛練を怠らなかつたわけである。

さて、護佐丸をなきものにした阿摩和利は、首里城攻略に着手した。その謀議を床下から探知した賢雄は、夫人にこれを告げ、二人は夜陰に乗じて城を抜け首里をさして逃げた。二人の逃亡を知った阿摩和利は、急ぎ軍兵に令してあとを追わせ、殺そうとした。賢雄ら和仁屋（一説に高原）を過ぎる時、軍兵が手に手にあかあかと炬火をかざして急追してくるのが見えたが、さしもの賢雄にも打つ手がなく、天を仰ぎ地に伏して大声で神歌を唱えた。モモトフミアカリヤテニチヨタメカチヘ アマナラチヘ サシフタスケワチヘ（百度踏揚りのことは、天地を揺り動かして、天を鳴らして、神女がこれを助けたまう）。すると、にわか豪雨となり、炬火はことごとく消えた。これで、二人はやっと敵の追撃をかわして首里にたどりつくことができた。東の空がうすく白みかけようとする頃であった。賢雄は首里城の美福門外から事の次第を言上した。百度踏揚の父王・尚泰久は、二人を見て、婦女たる者が夜道を男とつれだってくるのは不貞ではないかと怒りを発した。夫人は声をあげて泣き、押明森の樹木に縊れて死のうとした。王は容色をあらため、急ぎ開門させて二人を入れた。夫人はあらためて子細を言上した。賢雄はそこで、ナサノタタミキョカオワルテシラニヤ（百度踏揚には父なる貴人がおわすことを知らぬのか、ちゃんとおわすのだ）と神歌を唱えた。王は二人の申しひらきを一応信じたが、なおぐずぐずして（王女の貞節と阿摩和利の叛逆について）心を決めかねた。そこへ、首里殿内から、モモトフミアカリヤオレテアソヒヨワレハムカヒホコラ（百度踏揚が来臨し、神遊びをし給うのであれば、

お迎えし祝福しよう。)という神歌が献奏されてきた。この首里殿内祭神からの託宣で疑念が晴れ、父王は、王女百度踏揚が女の節義を失なわなかったことを非常によろこび、また同時に、阿摩和利の叛逆を知り、急いで軍令を発して兵を召集した。

一方阿摩和利は、軍機がもれたので、寸時も猶予せず、機先を制して首里城に攻め寄せた。攻城軍は首里城に火を放って攻めたて激戦になったが、守備軍がよく応戦し、また、衆寡敵せず、勝連軍は大敗した。敗走した阿摩和利軍はそのまま勝連城に籠城して持久戦に出た。

そこで尚泰久王は、賢雄を総大将に、舎弟の賢休と賢膺を副将に命じ、首里軍を組織して勝連城攻略のため派兵した。征討軍出発にあたって、王は、特に大城征討大将軍に対し五爪龍の貫紋、金入緞子、衣裳並に景光の刀大小二刀を下賜した。

首里軍は行軍の途次、一時越来城に駐屯した。勝連は、当時、首里からは「都遼遠の所」と意識され、変事があっても探知し難い地方とされていたからである。その一時駐屯は、兵の疲れをいやすことと、より精確な勝連の情報を得て軍議をねることのためであったようだ。そのとき、城をあずかる越来按司は、妻の懐妊を理由に援軍を断っている。当時の越来城は、中城、読谷山、越来、勝連を差配する重要な拠点であった。おそらく平時には徴税を主とする行政や民政にあたる首里城の出城であり、戦時には中山への侵略や内乱を防圧する拠点であったろう。この時首里軍は越来城から進軍した。

尚巴志による三山統一の功業なるといっても、その成功はいわゆる連衡策によるものであり、尚巴志軍単独によるか、圧倒的軍事力の裏づけによる尚巴志の統帥権による三山の統一ではなく、護佐丸などの諸按司との連合軍による三山統一であった。だから当然、連合軍に加わった有力按司の中には、尚巴志と彼につづく政権に全面的には服従しない按司もいた。護佐丸もそうだったろうし、阿摩和利は特にそうだった。

勝連城は天険の要害であるうえ、屋慶名赤<sup>70</sup>を筆頭とする猛将も多く、また阿摩和利は希代の兵法家で、守備軍の戦意は鋭気天をつくものがあった。とはいえ、賢雄は中山第一の鎗の名人である。勝連軍は城門をおし開いて撃って出で、賢雄は勇将百次と騎馬戦になったが、ただの一突きでこれを血祭りにあげている。これを見ていた勝連軍の四天王、真呉、白先、氷角、赤升は、部下を率いて賢雄に襲いかかった。賢雄は彼らを相手に、まさに「鬼大城」の名に愧じず、「龍ノ大海ニ躍リ虎ノ山岳ヲ走ルガ如」き働きをした。そして舎弟で副将の賢休、賢膺の応援でこの強敵を蹴散らしている。そして今度は、休む暇もあたえず大斧をブンブン振りまわして襲いかかってくる

敵の総大将屋敷名赤が相手である。勝連に屋敷名赤ありと剛力と剛勇をおそれられたその敵将と火花を散らす激戦となったが、賢雄は鎧を左手に持ちかえるや否や鉄の大鞭を赤の真甲めがけて振おろし、ついに難敵をたおした。勢いに乗じて賢雄は阿修羅のごとく暴れまわったが、敵もよく応戦し勝連城はびくともしなかった。

そこで賢雄は一計をめぐらし、女装して東側の城壁から城内に潜入し、階上に立って兵を下知していた阿摩和利に飛びかかり、刀で首を刎ねおとした。このときも賢雄は群羊の中を暴れ狂う猛虎の様であったという。この場面は、マケドニアの若きアレキサンダー大王が、オリエントの地深く遠征したとき、単身で城壁から敵陣の真只中にとびおるなど、何度も死に目にあいながら死中に活を求めた働きを彷彿とさせるものがある。

城主の戦死を聞いて勝連軍は首里軍の軍門に降った。首里城では論功行賞がおこなわれ、王は賢雄に紫冠位（親方）を授けた。また敗軍の将阿摩和利の遺品ならびに勝連城門楼をことごとく彼に賜うた。さらに越来、具志川間切の総地頭職に任ぜられた。後世には、一間切に按司地頭と総地頭（親方がなる）の二人がおかれ、村には脇地頭（親雲上がなる）がおかれた。どうやら賢雄の越来、具志川総地頭時代にもすでに、越来に按司地頭にあたるのがいたようだ。伝説によれば、阿摩和利の乱のとき、越来城をあずかる越来按司なるものがいて、賢雄から勝連征討軍への参戦を求められたが、妻の懐妊を理由に拒否した者がそれである。またこの者は、賢雄の不品行を国王に讒訴し賢雄の破滅を早めたという。1458年、賢雄は越来城主となった。そして王女踏揚按司が賢雄のもとに降嫁して、彼は尚泰久王の駙馬となった。越来城は、中頭方七ヶ間切のうち四間切を差配する「首里近畿の雄鎮」であり、かつてこの城は尚泰久が、そして後に尚宣威が城主になったが、この兩名はともに最高の顕貴で王位にのぼっている。このことからして、越来城とその城主が、首里からいかに重くかつ高く見られていたかという証左になろう。

なみはずれた腕力と智略と胆力で布衣から身をおこして位人臣をきわめた。しかし賢雄は勇武絶倫というだけの一介の武弁たるにとどまらず、神歌を即興的に自由自在にあやつることのできた歌神の武人であったようだ。一武人として琉球史乗に大きな足跡をしるしたばかりでなく、「おもろさうし」（第六）には、彼になる二首の神歌が採録されている。



きみがなしが節

342 百度踏み揚がりや  
<sup>て</sup>天地 よためかちへ  
<sup>あ</sup>天鳴らちへ  
 さしふ 助けわちへ  
 又君の踏み揚りや  
 又今日の良かる日に  
 又今日のきやかる日に

きみがなしが節

343 百度踏み揚がりや  
 降れて 遊びよわれば  
 迎い誇ら  
 又君の踏み揚がりや  
 又成<sup>あ</sup>さの貴<sup>たか</sup>み人が  
 おわるてて 知らにや

赫々たる武勲によって榮爵と福祿をほしいままにした賢雄も、武によって滅んだ。口碑によれば、賢雄の威勢が上がるにつれてこれをねたみ、何とかしておとしめようと機会をうかがっていた越來按司は、賢雄が城下宮里村石城の娘を妾にしたことをとらえて、これを不品行として尚円王に針小棒大に讒訴した。王はこれを聞いて賢雄懲罰の大軍を越來城にさしむけた。王の軍が自身に向けて進発したことを知った賢雄は、知花城の洞穴にひそかにのがれた。これを王軍に探知され、当時知花城の南壁にあった大村栗（現松本村へ移る）の全家屋をこわし、それに火をつけて火攻めにされ、衆寡敵せず遂に洞穴で自尽した。この洞穴がそのまま賢雄の墓として今日に知られている。また一説によれば、尚円革命のとき尚円王朝（第二尚氏）に反対する按司が北谷間切国直に集結し、第一尚氏の功臣である賢雄がその反革命の主謀者として反旗をひるがえした。しかし王朝軍に敗れて知花城の洞穴で自尽したという。口碑伝説はさておいて、第一尚氏の功臣であり姻戚である賢雄が第二尚氏の軍隊から攻められるのは不可避である。また、第一尚氏の時代からすでに進展しつつあったとおもわれる社会情勢の変化（地方の按司たちによる土地の割拠的領有制から首里王府への一元的領有制へ）をすくいあげ、意図的に自らへの土地と人民の集中を制度化しようとする第二尚氏の根本方針に、古い型の地方土豪である賢雄が相反する存在であった。そういう第二尚氏の基本方針が根本にあって賢雄が殺されたと見たい。

第二尚氏によって討伐された賢雄の家系は四代にわたって平民におとされたが、のち夏氏として復活させられ、以後第二尚氏王朝を通じて名族として通ってきている。直系は百度踏揚との間にできた血筋で摩文仁殿内と称する。支流からは琉球音楽の大家瀧水親方幸地賢忠を出している。

さて、知花の賢雄の墓前に墓碑が一基立っている。片仮名まじり文の和文である。以下解釈してみる。

○ ○ ○ ○ ○

当所はみずのえの方（北）を背後にし、ひのえの方（南）に向って位置する昔からの墳墓である。康熙55年申年（1754）に至って美里間切宮里村中間原に地理をえらび、そこに祖宗の霊骨をうつしたのであるが、（全部はうつさなかったのか）当所（知花の墓）にはなお銘のない厨子が残っていたといういい伝えがある。それで清明のお祭りには、両墓（知花と宮里の墓）に対しておこなわれてきていた。

ただし、うつし葬むる理由は墓地として地理がよくなかったといういい伝えだけれど、この墓はもともと知花村の者たちと共用であったという。とにかく寄合墓（ユレーもしくはユレー墓）では、（ご先祖に対する）尊敬にもならない、というこれらの点もかかわってのことではなかったかと、今になって見ると推量される。

ところが、宮里の墓は（墓地が）人工的に盛り土したものであったから、時々修理の費用がかかっただけでなく、（もともと）前面の方が地形上おちこんでいるうえ、寄せ土した関係上、長年月が経つと、ながもちほしないだろうということをご心配し、今の子孫たちが、再び霊骨を当所（知花の墓）の方にお移し申しあげたい、ということをご長年願ってきた。そういうことで、鄭良佐ていりやうさと儀通事視雲上に頼んで、両墓ふたつの風水をそれぞれ見分けさせたところ、当所（知花の墓）は山体が堅固で諸木がおい茂り、墓の前後左右と遠近の抱護が気脈貫ぬいており、前方を走る川筋など、すべて風水の法にかなない、地の美をえているとのこと。宮里の墓も全体の山形はよろしいけれども、遠方の山々の中に、（風水の法に照らして）忌み嫌うべき山があると申されている。まことに築造してから年久しく、抱護する山体も、きっと以前とはかわってしまったところも出来たのだらう。ことに墓の天井に湿り気が多く、遺骨のためにもならないだらう。青島経に「およそ地に五つの不吉な点があるのは改めねばならない」とあり、また伊川先生の御説によると、「地の美は祖先おきなの御霊を安らかにし子孫を繁栄させ、ちょうど木の根を培かい養なって枝葉が茂るようなものである。それでは、何を地の美というのだろうか。（地の美は）土色の光沢や潤い、草木の繁茂しているのがそのよし験である。父子や祖孫は生命を構成する根源が一であって、（冥土の）父祖が安らかな時は（今生の）子孫も安らかであり、父祖が危ういときは子孫も危ういのである。」と見えている、との良佐の教えをうけたまわり、それで、いよいよ子孫の中に、早く御霊骨を当所（知花の墓）にお移し申しあげようという意見である。

よくよく考えてみると、改葬することは容易ならざることではあるが、宮里の墓は前述のとおり、永くは維持しがたく、やむをえないとの（墓）碑がある。この知花の墓は風水が良いだけでなく、大昔から用いてきている。また雍正元年（1723）卯年付で知花村の者たちが書き留めたものに、鬼大城越来親方をはさむ先と後の先祖がどなたであるのか、お名前前の文字も知れないが、その安置されている厨子がめが大破しており、それを石厨子にとりかえて安置申しあげたとの趣旨が見え、そのことは当家（學文仁殿内）のいい伝えにも符合しており、あれやこれやし方ない事情で親疎の門中にも吟味させた。（中国で）朱先生の御靈骨が三度改葬されたお心持ちにならない、知花村の者たちには墓二基を造って与え、そこにそれぞれの先祖の遺骨をうつさせ、後年そのことで何やかやと申したてないという証書をとった。厨子記のとおり、石厨子四つに焼物厨子一つ合計五つ（三つには銘があり、二つには銘なし）はもともとから安置されていたのであるから、これら古昔の祖先は同根から生じた枝葉にちがいないと、もともとからしめていた坐を替えず、そのまま安置する。こうして修理を加えて、本年（1852）8月4日、宮里の墓から祖宗の靈骨をことごとく当所におうつし申しあげた。であるから後裔の子孫等はこのわけをよくわきまえ、抱護の山体や川の流れの順逆によく気をつけ、祖宗の旧墳墓が万世にわたって維持し、子孫繁盛と家内の平穩安泰であることをねがい、右の件を石に勒んで不朽にあらわし示すものである。

以上。

昔に

大清咸豐二年歲次癸丑十一月吉日

後裔超群謹誌

原文中読みのむつかしいのを2、3 あげておこう。因茲（これにより）。寔ニ（まことに）。熟惟ルニ（つらつらおもんみるに）。止事ヲ得サル（やむことを得ざる）。而已（のみ）。旁擲ナク（かたがたよんどころなく）。何角（なにかと）。最通り（もとおりに）。重畢（たれおわぬ）。

なお文中に登場する鄭良佐と儀通事親雲上は琉球王府の正史「球陽」にもでている。尚泰王の六年、つまり、この「夏氏大宗墓」の碑を立てた年の翌年1853年、英国船が難破し宮古に漂着するという事件がおこった。わずかに中国人22名、女子2名、英人6名が生存し、あとは洋中で溺死するという惨事であった。そのため、与儀は外交官官兼通事として王府から宮古に派遣されている。

また、文中「知花邑ノ者共エハ墓式箇所築立相与エ、、、、」とある墓二箇は「チャンバカ」と呼ばれており、賢雄の生れ育った喜屋武城のゆかりをひくものかも知れない。なお知花の故老によると、この二つの墓は通称チバナクビりに築き立てられ、一つは屋号新里、もう一つは屋号メントウが拜んでいるという。

本稿をすすめるにあたり、碑文の原文を収めてある中山盛茂編『琉球史辞典』および昭和7年刊『美里小学校五十年誌』を、現物の碑文と校合しながら書いたのであるが、その二書とも重大な取違がある。前書では、碑文冒頭に近い但し書きの部分が、(註二行ニ書カレ文字不明多シ故ニ略ス)としてあっさり略されている。また、末尾にちかい部分で、「同気ノ枝葉、、、」以下60字あまりの脱落がある。後書の方は、前書の二ヶ所における穴をうめていて大変ありがたい。特に冒頭にちかい部分の但し書きが収められているのはもっけの幸いである。採録したのが昭和7年だから判読可能だったのだろう。しかし当時からすでに同部分の磨耗がかなりすすんでいたとみえて、原文(現物)と注意深く校合すると大変な読みまちがいがあがる。その但し書きの部分を『美里小学校五十年誌』によって書き出して見ると左のとおりである。

但シ遷シ葬ムル(ノがぬけている)仔細ハ地理好カラザルヲ以テノ傳<sup>ヘ</sup>(エ)ナシ  
(レ)ト、此墓素ヨリ知花邑ノ者共ニ(モ)有(用)ヒタル由(ヨシ)兎角寄合墓ニ  
テハ尊敬ニモ不叶、此等ノ所ニテ(この字なし)モ相懸リタルカト今更ニ推量<sup>ラ</sup>ル<sup>ル</sup>  
(推シ量ラル)

以上のとおりであるが、傍点を付した部分は、現物と校合してみても疑わしいヶ所であり、その右の( )内は私が判読したものである。特に、「傳<sup>ヘ</sup>エナレト」が「傳<sup>ヘ</sup>ナシト」になると意味が逆になる。また、「有<sup>ニ</sup>ヒタル」では何の意味もまったくわからない。「有<sup>ニ</sup>」ははっきりと「用<sup>ニ</sup>」に見える。

この墓碑の材質は砂岩であり、磨耗のすすみが早い。「鬼大城之墓」を史蹟として教育委員会の方で保護する考えがあるなら、とりあえず、この墓碑に屋根をかぶせるなどして、それ以上の磨耗を防ぐのが先決ではないだろうか。

この報告書を作成するにあたり、次の方々  
にお世話になりました。

読谷村立歴史民俗資料館  
名嘉真 宣 勝

沖縄市文化財調査審議委員  
辺土名 朝 有

## 鬼大城の墓

沖縄市文化財調査報告書第2集

昭和55年3月31日印刷

昭和55年3月31日発行

発行 沖縄市教育委員会  
沖縄市字美里1,100番地

印刷 徳栄光堂印刷  
沖縄市字比屋根1426番地  
☎ 098939-1341

